様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１７日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：２２６５１０９３
研究課題名（和文）　江戸文学における女性ー江馬細香の漢詩と絵画を中心に

研究課題名（英文）　A Woman Literati-Painter in the Edo: A Study on the Kanshi Poetry and Sumi-e Paintings of Saiko Ema

研究代表者
宮川康子（MIYAGAWA YASUKO）
京都産業大学・日本文化研究所・教授
研究者番号：60251154

研究成果の概要（和文）：江馬細香は江戸時代後期を代表する女性漢詩人であり、また水墨画を描く画家でもあった。平安時代から男性言語であった漢詩文の世界に、彼女はなぜ踏み入り、それに生涯をかけたのか。本研究は漢詩と絵画の両面から、細香のアイデンティティー形成の過程を追い、江戸社会における女性詩人の生をジェンダー論の立場から考察するものである。
研究成果の概要（英文）：Saiko Ema is the most well-known of the women who wrote kanshi poetry and painted in sumi-e at the end of the Edo period. Traditionally, since the Heian period, kanshi poetry was mostly written by men. In spite of that custom, Saiko Ema dedicated herself to expressing her inner world in kanshi poetry throughout her life. How did she see the world? Why did she choose to express herself in literati painting and poetry?
Common evaluations of her work often present her only as an unusual and talented woman, but this study will examine in depth the individuality of her artistic expression of her inner world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800000	0	800000
２０１１年度	500000	150000	650000
２０１２年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
総　計	1800000	300000	2100000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：漢詩・水墨画・ジェンダー

１．研究開始当初の背景

江馬細香は江戸時代後期に生きた女性詩人である。頼山陽について漢詩を学び、浦上春琴に水墨画を学んだ。竹を愛し、生涯墨竹画を描きつづけた。近代以降の細香像は、男性文人たちに立交じって活動する、女性らしい慎みを欠いた奔放な女性として描かれることが多かった。近年門玲子氏の伝記小説などによって、これらの偏見が是正されつつあるが、いまだ細香の評価は近世女流詩人という枠内にとどまっており、近世後期という時代に、女性として水墨画と漢詩に自己表現の場を見出した細香の生き方が、何を意味しているのかが、近代に生きる我々の問題として問われることはなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、（１）細香の作品を、絵画と漢詩の両面から、その創作過程にまで遡ってその表現にこめられた意味を明らかにすること。（２）同時代の男性文人の作品との比較、中国における女性詩人との比較などを通じて、細香の自己表現の欲望と抑圧が、同時代のどのような社会的ジェンダーの規制を受けていたのかをあきらかにすること。（３）それらを踏まえて近代女性作家による作品の分析と比較しながら、近世から近代のジェンダーによる規制がどのように変化したのかを明らかにすることである。

３．研究の方法

江馬細香の作品は、漢詩については細香の死後出版された『湘夢遺稿』にまとめられ、またここに収録されなかった詩稿も影印本があるので、その全体を知ることができる。しかし水墨画については個人蔵が多く、その全体を見ることはむずかしい。本研究では、水墨画資料の収集調査からはじめ、研究代表者宮川がおもに思想史的観点から漢詩作品の研究分析を行い、研究分担者入野がユング派絵画分析の観点から水墨画の分析を行い、討議を行った。

４．研究成果

（１）漢詩作品について

これまでの調査分析で得られた成果を概略すると次の通りである。

①細香における竹の表象

細香は詩題としての竹に何を託したのだろうか。細香の竹を詠んだ詩の全体を年代を追って読んでいくと、竹に託された細香の内面の変化を読み取ることができるように思われる。同時にそれは一つの表象ではなく、さまざまな要素の多重的表象としてあったということも明らかになる。

まず若い頃の細香は、結婚をせず詩画という表現の世界に生きる決意をした自分の姿を、独立してまっすぐに伸びる清廉な竹の姿に託していたと思われる。それは出会ったばかりの山陽が婚期を逃した２７歳の細香を秋に咲く芙蓉の花に比し、何に拠って生きて行くのかと謎をかけたことと対照的である。しかしそれが竹の強さの表象であるとすれば、「湘夢」という号は、その裏に込められた細香の内面の葛藤を示している。「細香」（竹を吹き抜ける風の音）という号は山陽が与えたものであるが、彼女はそれ以前は「湘夢」を号としていた。「湘夢」とは、帝舜の死後湘水に身を投じた二人の妃、娥皇と女英の逸話によっている。二人の涙によって、有名な湘江の竹は黒い斑点を持つようになったという。細香はこの湘江の竹を生涯にわたって詩に詠んでいる。特に「雨中の竹」を詠む詩には、必ず湘江の竹が登場するといってよい。竹に注ぐ雨は、娥皇と女英の涙を連想させたのだろう。「千歳猶知怨難尽」という言葉には、千年を経ても尽きる事のない女性の嘆きが託されている。

やがて「三従総欠一生涯」と自らの生き方を回顧する年齢になると、竹は自らの生を後の世に託す子供に譬えられるようになる。

玉立湘江碧　玉立す　湘江の碧
逢人写数枝　人に逢いて　数枝を写す
流伝如有後　流伝　後有るが如し
不必恨無児　必ずしも　児無きを恨みず

この詩には「真情実語、之を読みて涕を揮る」という山陽の評語が記されているが、細香がこの時期またあらたな決意で詩画の創作に臨みはじめたこと、その強さの裏にある苦悩の深さをこの詩は示しているといってよい。湘江がここにも現われていることはそれを裏付けている。細香４４歳の作である。

山陽の死後、身内を失い、老父の病気の看病にあたる細香は、老いと直面するようになる。天保１２年頃（５５歳）から多くの墨竹画の連作を遺しているが、ここでも細香の表現に一つの転機が訪れたように思われる。これらの連作では、竹は多く擬人化され、細香に寄り添う伴侶となり、故人の姿を宿すものとなる。しかし細香はセンチメンタルな懐古に浸っているわけではない。この時期に「胸裏無成竹」という言葉が二度使われていることは注目に値する。ここでいわれる「成竹」とは何を意味するのだろうか。

胸裏無成竹　胸裏に成竹無くして
毫端豈得工　毫端　豈に工なるを得んや

とは蘇武の言葉であるが、胸中の成竹とは、細香が生涯をかけて求めつづけた自己の理想であったのだろう。年を取るにつれて筆を持つ手のうごきはますますぎこちなくなる。しかし絵に命を与える胸中の成竹を求めて自分は竹を描き続けるのだという強い意志がここには感じられる。さらにこの時期には竹を「龍」と表現することが多くなることも注目に値する。詩語として松を「龍」という例はあっても、まっすぐに伸びる竹を「龍」という例はほとんどない。天へと翔け上がる「龍」のイメージは、細香晩年の表現への情熱と、ある普遍的なものへの希求を表しているおではないだろうか。この晩年の連作については特に水墨画との連関が重要であると思われる。

②清朝女流詩人金逸との比較

頼山陽と江馬細香の子弟関係は、よく清朝の大詩人袁枚と女弟子金逸の関係に比される。山陽と細香自身もそれを意識していた。しかし結論からいえば、２５歳で夭折した金逸の詩の己の情念に沈潜した凄絶さは細香の詩とはかけ離れたものである。細香は『名媛詩帰』や大窪詩仏が出版した『随園女弟子

詩選』を山陽から送られて読んでいるが、「才人薄命何女此、多半空閨怨外詩」とその感想を詠んでいる。中国の女性詩人たちの詩が、ほとんど閨中の私的な世界にとどまり、己の内部の情念の世界に深く分け入って行くのに比べて、細香の詩は、外の世界に広く開かれている。細香は山陽を訪ねて８回京都へ旅をしているが、その他にも伊勢や岐阜など多くの旅をし、多くの詩を遺している。また大垣の水害や、幕末の安政の大地震、清国のアヘン戦争など、社会的・政治的事象にも関心を持っていた。中国や日本の歴史についての詩も遺している。山陽やその男弟子たちによる細香の詩の批正には、これらの社会的詩については男性的という評価がなされているが、細香自身は女性としての分を守る意志を持ちながらも、詩作においては、外への関心を生涯持ち続けていた。中国には見られないこのような細香詩の特質はジェンダーの視点からも重要である。

③源氏物語詩

清朝の袁枚と金逸との比較の中で、唯一重要だと思われるのは、細香の『源氏物語』への関心である。細香は源氏５４帖の総てを題材にした詩を作ることを意図していたように思われる。細香には帚木、夕霧や横笛など１３篇の源氏物語詩があるが、その総序として書かれた「読紫史」を読むと、細香が作者の紫式部に深い共感を持っていたことが窺われる。後に書き直されたものでは削られているが、「読源語」と題された詩稿を上げておく。

一枝清筆写情思
條別嬌花百種姿
五十余篇妙文字
女児不朽勝男児

特に最後の句には、男性に伍して不朽の名作を遺した式部へのあかがれが現われているだろう。

これは金逸が『紅楼夢』を愛読し、その女主人公に自らを重ねていたことと比較すると興味深い。金逸が浪漫的な作中の人物に同一化を求めたのに対し、細香は『源氏物語』を生み出した女性としての紫式部に同一化しようとしているのである。このことは同時代に書かれた管茶山の源氏詩などと比較すると、その位相の違いが明らかである。

（２）水墨画について

水墨画は伝統を重んじ、その画法にも多くの決まった約束事がある。その中で細香独自の特徴と表現意図を読み解いていくのは、極めて難しい。そのためには作画のプロセスを再現すること、竹の画法と筆の動きを追体験することが必要となる。細香の水墨画で実際に細部にわたって詳細な観察が可能な資料としては、幼少期の習作と晩年の作品のいくつかに限られている。そのため入野は墨竹画の実際を学び、細香の作品の模写を試みることから、分析にとりかかった。

墨竹画は、写実画ではなく心の中の竹を描くといわれる。また、通常の絵画では、写実であれ抽象画であれ、そのキャンバスには、さまざまなモチーフが描かれ、それらがそのシーンの「物語」を、そして、その向こうに広がる描き手の内的な世界を現し語りかけてくる。しかし、墨竹画に描かれるモチーフは、竹、岩、苔、下草など極限られている。時には、竹のみが特有の細長い画面に描かれる。それは、あたかも、細い隙間から見える、人の深遠な心の奥に広がる世界を切り取った印象すら与える。隙間の前を瞬時過ぎった、心の動きであり、また、間隙から漏れた光の中に浮かび上がった、無限の広がりの中の一部の景色である。

細香の画の特徴の一つは、稽古書にも現れているように、緊張感とリズミカルな動きを感じさせる一筆で描かれる竹の葉にある。細香の筆は、筆穂の片側により強い緊張を保持し、その緊張感は、払いぬくまで続く。そして、それはしなやかな動きで、次の葉へと移り竹の姿を表していったことが推測される。それは、凛とした品格、時にはユーモラスな印象さえもたらす、しなやかな動きを細香の画にもたらしていると考える。

以下数点の画についてその分析を述べる。

①白鴎社集会図　（部分）

細香は文政の初めに、梁川星巌、村瀬藤城らと共に詩社白鴎社を結成した。この児玉石峯による白鴎社集会図には、３人の男性に対峙するように位置する細香の姿が描かれている。細香はこの時 36 歳くらいであった。髪をきりっと結い上げ、口元を引き締め、ほっそりとした姿は、その後方にいる紅蘭の丸みを帯びた髪形や姿が醸し出す雰囲気とは異なっている。とりわけ、彼女の膝に置かれた手は興味深く、細香という人を知るまさに手がかりのようである。彼女は、右肩をぐいと入れて相手のほうに身を乗り出して話を聞いている。その肩を支える膝の上の右手は、手の平が上にねじられ、ほっそりとした左手がそれを包んでいる。そして、左手の外に残された右手親指は、緊張に満ちている。この絵姿からは、細香の詩文に向き合う厳しく真剣な態度と、毅然とした生き様が伝わってくる。

②幼少期の習作

多保５才画と署名されたこの絵は、これを懸命に描く幼い細香の姿を髣髴とさせる。竿も葉もその筆跡には覚束無さがみられるが、同時に、ためらいのない筆の運びで竿が描かれ、リズミカルに、大胆に葉が描かれている。一

枚一枚の葉、とりわけ右上の一叢は、それぞれの葉の表情が異なり、５歳の子供が筆を運ぶ様子が見えてくる。ここにすでに、細香の画の特徴は現れている。一方、その葉の茂みから、飛び立ったかのような雀２羽は、まるで、下絵のままに置かれたかのようであり、また、遠くにはとても飛べそうもない印象を

与え、これもまた５歳の幼女の姿と重なって印象深い。

③六曲半双の屏風

残念ながら、現在知られている細香の画は、人生後半のものがほとんどである。これらの画を通して、細香という人をその人生を考えるにあたっては、この多保袞の名前があり、若いころ、少なくとも山陽に出会う前の細香が描いたと思われる、六曲半双の屏風に描かれた竹六態の図が、多くの手がかりを与えてくれる。この画は、３つのテーマで、６態の竹が描かれている。一つは竹竿、そして、竹枝と竹葉、もう一つのテーマが竹全体の姿である。この屏風に描かれた 6 態の竹の中で、右の２面に描かれた合計３本の細い竹竿をもつ竹の姿は、後の細香の画のスタイルに似ているが、他の４面の竹の姿は異なっている。

まず、大きな違いは、右の２面の竹は、画面という空間に静かにたたずんでいる。あるいは、別の言い方をするなら、これらの竹に焦点があっている。一方、左４面は、たまたま、その視野の中に竹があったか、あるいは視野の中に竹が入ってきたといった印象を与える。そして、これらの画は、その筆跡から、同じ時期に細香が書いたものではなくて、かなり描かれた年代に開きがあるのではと推測する。すなわち、左の２面、真中の２面、そして右の２面という順に、描いた年齢は高くなる。

ところで、細香の画の特徴である葉の形は、真中の２つの竹にすでに現れようとしているが、払いの「ため」や緊張感はなく、長く尾を引く葉が描かれている。また、右端の画の竹の葉には、細香特有の緊張感を感じさせるものになっているが、葉の形は直線的で、固く尖った印象を与える。そして、これらの６態の竹は、いずれも、葉は塊として描かれており、一枚一枚の葉の豊かな表情はまだ見せていない。

④晩年の墨竹画

細香の 66 歳以降の画には、もう一つの特徴が見られる。それは、切り取られたり曲がったりした竹の姿と、地面の急な傾斜というテーマである。66 歳の時の画の一番手前の竹は、竿の頂点が切り取られている。また、72 歳の作では、一番手前の竹は岩との関係において不可思議な場に位置し、竿は上方の節で右に傾く。まるで、左の障害あるいは左からの力によって、真直ぐに伸びることはできなかったかのようである。そして、この竹の葉 ― 特に先端の一叢の葉において ― は先端が二股に分かれる。その後方の影のように立つ竹の葉には、そのような特徴はほとんどないことから、細香は、まさに、そのようにこの前面の竹を表したのである。

ところで、人は樹木に己の姿を投影することが知られている。木の立ち姿、成長の過程や四季の移ろいの中でのその様態の変化には、人の姿を人の一生を映し見ることができる。Charles Koch によって 1949 年に著され、人格診断の一つとして広く知られるようになったバウム・テストでは、描かれた樹木は、描いた人の人生の時間経過と、その人生における大きな出来事を無意識のうちに表すことも示されている。

66 歳のときの画である先端が切り取られた竹の絵において、切り取られた竹と後方に重なり影のように添った竹の高さとを比べると、この竹は細香の 50 代前半の年齢で止まったとみなすことができる。蘭斎が没したのは、細香が 52 歳のときであった。さらに、細香の 72 歳の時の画を見ると、曲げられた竹竿の節は、真中より３分の１ほど上方に位置する。竹の年齢を、細香の年齢 72 歳と重ね合わせて考えるなら、曲げられた節の位置は、48 歳くらいになる。細香が 40 代後半の頃に経験した大きな出来事といえば、45 歳の時の継母の死、その翌年 46 歳の時の山陽の死であろう。このような竹の姿と、細香の人生における大きな喪失体験との符合を考える時、60 代後半の画からは、「湘波万頃泊弧蓬」の詩と対になった画－雨に煙る竹林―の表現する「痛恨の深い悲しみ」のテーマがあることに気付かされる。

とりわけ、この雨に煙る竹林の画は、それまでの細香の竹の描き方とはまったく違っている。手前の濃い墨で描かれた竹は、右下に向かって大きく傾斜した地面に立っている。しかも、その地表を表現する傾斜した線の重なりは、今にも地面は崩れ竹もろとも滑り落ちそうな、不安定感を強調し印象付ける。そして、雨に濡れた葉は、ことごとく下を向

く。細香特有の緊張感のある、葉先端部での筆の払いはここには見られない。むしろ細香は、一枚一枚の竹の葉の先端で、雨滴が重く滴るごとく一度筆を留めている。この筆使いによって、画は一層、重く陰鬱な雰囲気を表す。そして、幾通りもの濃淡で朧に描かれた竹の姿は、この空間の果てない深さを表し、虚無感をも感じさせる。

細香の晩年の画が語ることを分析するには、今後さらに若い頃の作品を発掘し探究する必要があると考える。しかし、少なくとも、細香の描く竹の画は、まさに細香の内的世界を表すものであり、竹を描くことを通して、自分自身に向き合った細香の生きる姿勢を表していると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　件）

〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
宮川康子（MIYAGAWA YASUKO）
京都産業大学・日本文化研究所・教授
研究者番号：60251154
(2)研究分担者
入野美香（IRINO MIKA）
京都産業大学・文化学部・教授
研究者番号：10151698